

## 人間50年

院長 工藤 靖夫

人間50年、下天の内をくらぶれば、夢まぼろしのごとくなり。織田信長が桶狭間の合戦に臨む前に、一差し舞ったとされる幸若舞“敦盛”の一節はあまりにも有名です（信長公記）。この文章の意味として、人生は50年程度なので、懸命に生きなければならないと、我々は理解しています。確かに、その当時の平均寿命は、せいぜい50年であったと考えられています。実際、織田信長が享年49歳、武田信玄52歳、上杉謙信48歳、北条氏康56歳と50歳前後ですが、豊臣秀吉61歳、徳川家康73歳をあげるまでもなく、平均寿命50歳というのは、周産期死亡率が高いだけで、当時も老人は結構いたようです。つまり、50歳だから、人生も終わりに近づいたとは考えていたわけではなさそうです。確かに、人間50年であり、人生50年とは言っていない。ではどういう意味でしょうか？

この幸若舞“敦盛”の原典は、インド仏教の“俱舍論”からきているという説があります。天は神の住むところであり、下天というのは四天王（持国天・増長天・広目天・多聞天（毘沙門天））の住む場所とされます。そして、四天王の寿命は500歳で、人間界の50年が四天王の一昼夜に相当する。つまり、長い年月に思える人間界の50年も、四天王界に比べれば、夢幻のごとく一瞬に過ぎないといっているのです。50年というのは、平均寿命の50歳のことではなく、はかない人生のたとえなのです。平敦盛は源平合戦の「一ノ谷合戦」で、熊谷直実に一騎打ちで敗北し、討ち取られます。若い敦盛を討ち取った直実は世の無常を感じ、出家してしまうというあらすじには、まさに人生の無常を考えさせられるのです。

実際に、織田信長が謡い舞った一節をあげてみます。

思えば、この世は常の住処にあらず。

草葉に置く白露、水に宿る月よりも猶あやし。

金谷に花を詠じ、栄花は先立て、無常の風に誘はるる。

南桜の月を弄ぶ輩も、月に先立って、有為の雲に隠れり。

人間五十年、下天の内をくらぶれば、夢まぼろしのごとくなり。

一度生を受け、滅せぬもののあるべきか。

まさに、人生のはかなさを切々と謡っているではありませんか。



『平家物語絵巻』敦盛最期

祇園精舎の鐘の音、諸行無常の響きあり。

沙羅双樹の花の色。盛者必衰の理を現す。

奢れる人も久しからず。唯春の夜の夢の如し。

猛き者も終には滅びぬ。偏（ひとえ）に風の前の塵に同じ。

思えば、人間の宗教も芸術も全ては、この終わりのある短い人生をどのように受け入れるかのために、大脳が作り上げてきたものに他ならない。先日、恩師の葬儀に参列して、浄土真宗の御文の一節を聞いた時も、“朝に紅顔、夕べに白骨”と人生のはかなさを説いている。山本有三の路傍の石でも、“人生は死ぬことじゃない。生きることだ。これからのものは、何よりも生きなくてはいけない。自分自身を生きさなくってはいけない。たったひとりしかない自分を、たった一度しかない一生を、ほんとうに生きさなかったら、人間、生まれてきたかいないじゃないか。”と語っている。はかない人生だから、懸命に生きること、生きる理由を見出そうとするのであろう。おそらく、このことは極度に発達した大脳が作り出した人間にだけ特有の物である。生物は遺伝子に支配されているというドーキンスの“利己的な遺伝子”の呪縛から、人間は解き放たれ、新たな生きる目的を作り出そうとしているのである。生物を神が作ったのであれば、人間はその域に近づいてきたのかもしれない。

### 《追 想》

1955年（昭和30年）生まれの私は、現在53歳です。実は野口英世博士がガーナのアクアで研究中に黄熱病に罹患され他界されたのが51歳でした。なぜあの人は、寝る間も惜しんであれほどに研究に執念を燃やしたのだろうか？

また、先日〈奥の細道〉で有名な松尾芭蕉も享年51歳であることを知りました。芭蕉と聞くと芭蕉翁などと言われるし、頭巾をかぶり、黒染めの道服、足は脚絆と草履という行脚姿が浮かんで来て、かなり枯れた老人かと思っていましたが、没年が私の年に近いとはとても以外でした。〈奥の細道〉の冒頭は、あの有名な〈月日は百代の過客にして、行きかふ年もまた旅人なり〉であり、辞世の句は、〈旅に病み夢は枯野をかけめぐる〉です。芭蕉においては、〈旅＝人生〉であったようです。

自分が野口博士や芭蕉翁のような真摯で濃密な生き方をしてきたか？と自問すれば、恥ずかしくなってしまいます。孔子は、〈五十にして天命を知る〉と語りました。50の知命を超えているのに、いまだ人生の目的を追い求めている自分に歯がゆさを感じている毎日です。人生の終わりを見据えて、何か生きた証を残したい、何か役に立ったと思いたい、けっして無駄な人生ではなかったと思うためには、やはり今現在を悔いなく生きることに答えがあるのかもしれない。